

## 中国伝統医学と道教（第38回）「チャクラと奇経」

吉元 昭治

吉元医院

インドの歴史は石器時代から初まり、BC3000～1800年頃原住民がモヘンジョダロ、ハラッパ遺跡のこした（インダス文明）。偶像があり、自然崇拜宗教で火を重んじた。BC1500頃西北方よりインド・アリア人が侵入し、彼等はバラモン教を信奉していた。BC1000～500には東、ガンジス河に達し、農耕を行っていた。BC500頃に、バラモン教の教義に対し仏教・ジャイナ教などがおこり、次第にバラモン教は衰え、仏教の影響、バラモン教との習合などからヒンドゥー教がでてくる。インド宗教で、現在までつづく。バラモン教にはヴェーダという4聖典（リグ、サーマ、アジュル、アタルバ）とウパニシャッドがある。ヴェーダ時代ともいわれ、現在まで尾をひいているカースト制がある。プラフーマナという司祭者を最高とし、ウシャトリヤ（王族）、ヴァイシャ（庶民）、シュードラ（奴隷）という四階級があり互に不可侵的で確固たる社会システムをつくっていた。ヒンドゥー教の神には、ヴェーダ時代のインドラ（仏教の帝釈天）がいるが、三大主神として、プラフーマ（聖天）、シバ、ビシュヌ神がいる。プラフーマ神妃、サラスパティー（弁才天）、シバ神の子、スカンタ（韋駄天）、ガネシアがいる。ビシュヌ神は化身して、九番目に仏陀があり、仏教がヒンドゥー教に吸収された事を物語っている。7～8世紀に6哲学思想がおこる。この中にヨーガ学派がある。これにはさらにラージャ（王道派）、バクティ（信愛派）、カルマ（行為派）、ジュニャーナ（知識派）、マントラ（真言派）、ハタ（強制派）のヨーガがある。現在ヨーガといっているのは、このハタ・ヨーガでその発生はシバ派で、タントラ派ともいう。その体を鍛えるという一面が現在の健康増進、美容方面に利用されている。シバ派タントラは又、性力派ともいい、シバ神妃パールバディーの力、シャクティー（性力）を充める流派でこの中にチャクラ（輪）が解脱目的のためにある。七世紀頃に最高になる。チャクラは脊椎に沿って6つあるとされ、これに尾骨と頭頂部のチャクラが加わる。下よりアグニ（シバ神妃と同一視され、会陰下部、シャクティーのどところ）、ムーラーダーラ（会陰）、スパーディシュター（臍）、マニプール（臍上部）、アナハータ（心臓）、ビシュダ（咽喉）、アニジュニャー（眉間）、サハスラーラ・チャクラ（頭頂、シバ神がいる）のチャクラである。瞑想、止念、座坐、呼吸法でプラフーマ（氣息、生命エネルギー）をチャクラを貫通するスシュムナー、イダー、ピングラの気脈を通して下方より漸次上昇させ、頭頂で下方のシバ神妃のシャクティーとシバ神とを合体させ、解脱に達して、輪廻から解放され修行の目的が達成される（解脱は仏教や禅の最終目的でもある）道教の仙人も同じである。奇経は周知のように八脈あり、中でも任・督・陰蹻脈は重要で、丹田には上・中・下あり、自律神経叢にも一致している。道教の内丹術でいう小周天（小河車）は精気神が体内を巡っているが、練成化気して気は督脈にそって下丹田から頭頂に、次いで任脈に沿って下り下丹田にもどり一巡する。陰蹻脈はこの気の上昇のスイッチ的役目がある。大周天（大河車）とは錬気化神で全ての八脈が通じて解脱に到る事をいう。このようにチャクラと、中国医学の奇経、丹田、道教内丹の小周・大周天とは互に係わりがあるといえる。なおアユール・ヴェーダ（インド医学）は伝統的に今でも医療機関、医師育成が行われ、その医師達によるインド民衆の医療を担っている。達磨が6世紀、インドから中国にわたり禅をもたらしたのも重視したい。